

子どもをどう見るか

ステレオタイプを刷り込まれると…

2018.07.02

No.21

校長 渡邊 幸二

明日もとても暑くなりそうです。あさってあたりまでこの暑さが続くと思われまので、どうか熱中症等にご配慮ください。

今日、こんなことがありました。

校門へのいたずら

誰かが木の実か何かで、校門の壁に赤い染みをつくっていると、5年生の子どもたちが報告に来ました。水か何かで洗ったら汚れが取れそうか聞くと、たぶん取れるというのでそうじをお願いしてみました。やってくれるとは期待していたのですが、これまでは案外断られることが多かったと感じています(5年生というわけではなく、いろんな子どもにかかわってみてです)。自分で付けた汚れではないし、もちろん断ってもいいわけですが、それでもやってくれるのが浜田っ子だと思っていました。

5年生の(私のうる覚えの記憶では)I. Kさん、K. Mさん、K. Hさん、S. Kさん、N.

Aさん、H. Yさんだったと思いますが、さっそくバケツと雑巾、それにブラシを預けられそうじに向かってくれました。西日差す暑い中、5分以上そうじしてくれてたでしょうが、声をかけると大体取れたと戻ってきました。そして子どもたちは当たり前のように、さわやかな風と共に帰っていきました。

ある本に「ステレオタイプを刷り込まれると、まさにそれを踏襲してしまう」という論文があることが紹介されていました。私たちは、こういう社会奉仕的な作業はなかなかやってくれないと思ひ込む(子どもに刷り込む)こともできます。しかしそうではなく、こんなよさを浜田っ子全員で共有していく(刷り込む)ことで、浜田っ子たちがそちらへ引っ張られるような積極的な生徒指導を進めたいものです。

何メートル泳げた？

3・4年生が水泳から戻ってきました。校長室前を通る3年生のほとんどがえしゃくをしていってくれました。うれしいことです。いろいろ課題のある子どもたちですが、ダメなところに注目しては、おそらく課題は増幅されるばかりでしょう。学校も家庭も、当たり前なこと、小さな進歩に目を向けることが重要だと考えます。

さて、そんな3年生の、ちょっと課題のある子どもにAさん、Bさんがいます。その子どもたちも校長室の前を通ったので声をかけてみました。おそらく愛情不足があると推測されるので、プラスの声をかけてあげたい子どもです。



Aさんに「何メートル泳げた？」と聞くと、「25メートル」という答えが返ってきました。「クロール？」と聞くと「平泳ぎで！」と言うので、すごいねとか、たいしたもんだと言った後、「じゃ、次の目標は？」と聞くと、とても素敵な笑顔で「クロール25！」と答えてくれました。他愛もない会話ですが、私にとってはとてもうれしい反応だったし、素直な受け答えと笑顔にAさんの立ち直りが見えたように思えました。



次に通りかかったBさんにも同じように聞いてみました。Bさんもいつもと違う柔らかな表情で「25メートル！」「クロールで」と答えてくれました。「じゃあ次の目標は長い距離を泳ぐことだね」と言うと、さわやかな笑顔でうなずいて、そして階段を上っていきました。

どちらもいけないことをする場合があります。注意されることばかりが続けば、おそらくますますエスカレートして、もっともっと残念な子どもとなるでしょう。こんな子どもに対して我々がやるべきことは、残念な行動に対する叱責ではなく、**その行動の目的を理解し、時には叱り、時には諭し、そして多くの場合はその子どもの当たり前前に注目すること**だと考えます。良いことではなく、当たり前前に光を当てることで、子どもたちにその価値を伝えることです。

「ステレオタイプを刷り込まれると、まさにそれを踏襲してしまう」

このことを肝に銘じ、つまり、**教師の見方が子どもをつくる**ことに注意を払い、子どもたちの心を育み、自立へと導いてください。子どもがまっすぐ成長するかは、先生方の見立てにかかっています。

